

令和元年度 奈良市立鳥見幼稚園 研究実践概要

園長名 八木 英治
全園児数 41名

1. 研究主題

「なかまと共にいきいきと活動する中で、たくましい心と体を育む」

— 発達の過程や時期を見通して —

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

子どもが自ら考え主体的に活動する姿を、いきいきと活動する姿と捉え、その積み重ねが、たくましい心と体を育むと捉えた。子どもが主体的に活動するためには、子どもの発達の時期を見極めることで、必要な保育内容や環境構成等が行えると考え、研究を進めることにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・意欲的または主体的に活動する姿について、その要因を探ることで、その時期の子ども達の発達の姿を明らかにする。

②研究の重点

- ・研究主題について研修を行い、教員相互の共通理解を深め、研究を深める。
- ・幼稚園教育要領及び奈良市立こども園カリキュラム等を活用するとともに保育記録を工夫し、幼児の発達の過程や時期を見極める力量を身に付ける。
- ・コミュニケーション力の向上や自尊感情の高まりを目指し、小学生や地域の方などとの交流を計画する。

③活動の方法

- ねらい _____—子どもが考えたり主体的に活動したりする姿
- 主体的な姿につながる要因

【事例1】 「切符ください」 4歳児 6月

○思ったことや考えたことを友達に言葉で伝えようとする。

○友達や保育者と関わって遊ぶことを楽しむ。

A児とB児が積み木でバスをつくっている様子を見ているが遊びには入らないC児。保育者は、C児の様子を見守った後、「どうしたの。」と、尋ねる。「僕もこれやりたい。」と、話すC児に「どうやったらバスに乗れるのかな。」と投げかけると、「電車(以前の電車ごっこ)の時、どうしたやつ持ってこようかな。」と、答える。「切符やね。一緒に探しに行こう。」と、製作コーナーに誘う。製作コーナーには、子どもが自由に使えるよう、事前に扱いやすい大きさに切った画用紙や水性ペンを準備しておいた。C児は画用紙をはさみで切り、「先生ここに字かいて。」と、保育者と一緒に切符をつくる。保育者は、A児にC児が切符をつくったことを知らせる。C児は「水族館ま

でお願いします。」と、A児に切符を渡し、A児は「ここに乗って。」と伝え、一緒に遊び始める。

しばらくして、D児が絵を描いた切符を持って来る。保育者は、「Dくんの切符、何かかいてあるよ」と、切符に絵をかいていることを、周りのこどもに知らせる。そこへ、E児が「仲間に入れて。」と、やって来る。A児が「切符ください。」と言うと、「字書けへんもん。」と、困った表情を見せる。B児は「D君みたいに絵かいたらいいやん。」と話し、D児も「ぼく、おひさまの絵描いたで。」と、自分の切符を見せ、C児は「こっちに紙あるよ。」と、製作コーナーへ誘う。E児は切符をつくりA児に渡す。「バスが発発します。」の掛け声とともにバスごっこは続く。



(反省・評価)

- ・遊びに興味があるが入ることができなかったC児に、保育者が誘い寄り添うことで安心し、自分で切符を渡したり、E児に進んで声をかけたりすることにつながった。
- ・D児の発想を保育者が認め、他児にも知らせておいたことが子ども達の経験の一つとなり、E児が困った際に、自分で考え知らせる姿となった。

【事例2】 「ひまわりさんのに似てる！」 4歳児2月

○目的に向かって自分なりに挑戦し、力を発揮する。

○考えたことやイメージしたことを伝え合い、友達とのかかわりを深める。

5歳児の生活発表会のリハーサルの中で、「あやとりを使った手品」を見る。

その日の弁当後、A児とB児は、あやとりの本を見ながら、「あっ！これひまわりさん(5歳児)がしてたやつ。」「こんな輪っか使ってたな。」と興奮した様子で話し、「やってみたい。」と、それぞれテープの芯を持って来る。C児も加わり、本を見ながら挑戦し始める。「ここまでできた。」「この後どうするの。」と、それぞれが思うことを伝え合いながら進める。保育者は、必要に応じて隣で指の動きを見せたり、手をとって一緒にしたりする。できるようになると、保育者に披露して喜び、保育者も、「ひまわりさんみたいにできてるね」と十分に認める。A児は「見ててください。マジックです。」と友達の所へ行き、披露する。「すごい。ひまわりさんのしてたやつや。」と興味をもち、「ぼくもする。」と数名の他児も参加する。何度かやってみるがうまくいかず首をかしげるD児を見て、A児は、「この指とこの指外したらいいねんで」と教える。保育者も横で励ましながら一緒にする。

後日、音楽をかけて踊るステージごっこのショーの一つとして「マジック」をそれぞれが披露して遊ぶ姿が見られた。

(反省・評価)

- ・この時期の4歳児にとって、5歳児は憧れだけではなく、もうすぐ自分たちも5歳児になれるという期待もあり、今まで以上に「5歳児みたいになりたい。」という思いが強くなってきている。5歳児にアドバイスをしてもらったり、一緒に手品をしたりと互いに交流を深められる機会としたかったが、様々な事情によりできなかった。
- ・保育者と一緒にしたり、できたことなどを十分に認められたりしたことで、安心感や自信をもち、友達に披露したり、教え合ったりする姿につながった。

【事例3】 「サッカーをしよう」 5歳児6月

○友達と一緒に十分に体を動かして遊ぶ。

○思いを伝えたり、聞いたりしながら、友達と一緒に遊び方を考える。

男児数名が、「サッカーしよう。」と、ボールを思い思いに蹴ったり追いかけていたりしている。しばらくその遊びが続き、保育者も一緒に遊んだり、応援したりしながら様子を見守る。

ある日の弁当後、A児が「日本代表みたいなユニフォームつくりたい」と、製作の棚からカラーポリ袋を見つけ、「こことここを切って手と首が出るようにしたい。」と、保育者に伝え一緒につくる。その様子を見ていた数名の子ども達もユニフォームをつくり始める。

次の日、子ども達は、ユニフォームを着てサッカーを始め、今までのようにボールをパスしたり、友達が蹴ったボールを追いかけていたりしている。しばらくして、A児が「同じ色のユニフォームを着ている人が同じチームなのはどう。」と、友達に話し、「それ、いいな。」「やってみよ。」と、みんなで相談して決める。保育者も「同じ色のユニフォームの人が同じチームなんだって」と、サッカーをしている子ども達に聞こえるように声をかける。A児「B君、いくで」と、同じチームのB児にボールをパスする。B児はボールが取れるように追いかける。他チームのC児もボールを取ろうと同じ方に走る。C児「D君とE君は僕と同じチームやんな」、A児「F君は赤の服やからB君と僕と同じチームやで」と時々、確かめ合いながら遊ぶ。

その後、チームやゴールキーパー、簡単なルールを決めたりしながら遊んでいた。また、その様子を見ていた他の子ども達も、応援旗やスポーツドリンクをつくり、観戦したり応援したりして、サッカーの試合が続いた。

(反省・評価)

- ・ボールを蹴ったり追いかけていたりすることだけを楽しんでいたが、十分に遊んだことで、ユニフォームを着たいという気持ちが芽生え、自分たちで次の遊びの形へと進めることができた。
- ・ユニフォームをつくったことで、チームという意識が芽生え、友達同士相談したり、ルールを確認したりしながら、遊び方を考えて遊ぶ姿につながった。
- ・サッカーをする友達の、一生懸命で楽しそうな様子が周りの子ども達にも伝わり、スポーツドリンクなどを差し入れしたり応援旗で応援したりと、サッカーに参加していなくても、自分なりの方法で次々に遊びに参加し始めた。

【事例4】 「空気が足りないのかな？」 5歳児12月

○遊びの中で身近な物の仕組みに興味をもったり、気づいたりする。

○同じ目的をもった友達と試したり、工夫したりして遊ぶ。

園行事で大学の教授と学生による『サイエンス体験』を経験し、空気砲や傘袋ロケットで遊んだり、プラネタリウムを見たりして楽しんだ。

次の日、段ボールや紙皿・紙コップ・傘袋等を製作ワゴンに準備し、1つの段ボールにだけ穴をあけておいた。A児が穴の空いた箱を見て、「昨日の空気砲や。」と、箱を叩き、「わあ、風が来たで。」と、喜ぶ。B児とC児も「ぼくのもつくろう。」と、段ボールに穴をあける。B児「昨日の空気砲は穴から白いけむりが出てたよな」、A児「穴から何かが飛び出るとおもしろそう。」と、紙皿やプラスチックカップを穴にかぶせたり、入れたりして、飛ばす。C児「カップはあんまり飛ばへん」B児「強く叩いた方がいいんちゃう」と、叩く強さや場所を変えたりしながら繰り返し挑戦するが、思うように飛ばずがっかりしている。保育者もしばらく一緒に試したり、困ったりしていたが、子ども達の横で空気砲の穴に紙コップを入れて飛ばしてみる。その様子を見て「わあ、



すごい!」「飛んだ。高い!」と、顔を見合わせて驚いたB児、C児は、すぐに紙コップ取って来て飛ばし、「高く飛んだ。」と、喜び合う。その後、何度もやってみるうちに、飛び方に違いがあることに気づき、互いに気付いたことを伝え合って遊んだ。

数日間かけて、様々な素材を飛ばし比べ、紙コップが1番高く飛ぶことに気づいたB児は、「紙コップをもっと高く飛ばしたい!」と、考える。「空気が足りないのかな。」と、段ボールの隙間やコップを入れる穴のまわりをガムテープでとめ、空気が漏れないように工夫し、「今までより、高く飛んだ。」と、喜んでみんなに知らせる。保育者も子ども達と一緒に紙コップを飛ばしたり、どちらが高く飛ぶか競い合ったりする。子ども達は、とんだ高さに、喜んだり悔しがったりしながら、より高く飛ばそうと、叩き方や段ボールを置く角度等、様々な工夫をしたり、友達と教え合ったりしながら何度も挑戦し、喜んだり、悔しがったりしていた。その後も、的や壁



を作り、それを狙ったり越えさせたりして、遊びが続いた。

(反省・評価)

- ・『サイエンス体験』で興奮して遊ぶ子ども達の様子を見て、関心が高いことがうかがえたので、次の日に自分たちでできるように、必要と考えられる材料を準備しておいたことで、子ども達の興味がさらに深まるきっかけとなった。段ボール箱1つだけに穴を開けておいたことで、すぐに空気砲で遊び始めたが、保育者が穴を開けなくてもよかったのではないかと考える。
- ・「高く飛ばしたい。」という思いの強さが、様々な素材や叩き方を試したり、空気の力で飛ばすことに気づき空気が漏れないように工夫する姿につながった。
- ・保育者が、子ども達より高く飛ばすことで、「先生に勝ちたい。」と子ども達の目標となり強い思いをもつきっかけとなった。

5. 研究の成果

- 入園当初の子どもは、人や遊びへの関わり方にも個人差が大きい。一人一人の様子に合わせ、保育者が寄り添い誘うことや、見通しをもった援助や環境構成をしておくことで子ども同士のかかわりが生まれるきっかけをつくる必要があると感じた。
- 4歳児後半になると、5歳児への憧れが強くなり、目標として5歳児を見るようになる。また、友達同士の関わりも強くなり、互いに関わり合って遊ぶ姿が多くなるが、保育者との関わりで安心感や自信をもつことで、さらに友達へ心向けることができる時期でもあるので、保育者は、子ども同士の関わりを見守りながらも、必要に応じて一人一人への丁寧な関わりも大切にしなければならない時期であると分かった。
- 5歳児の始めは、子ども一人一人の楽しみを優先した遊び方が多い。保育者は、5歳児から集団で遊んだりルール等を決めたりして遊んでほしいという思いをもってしまいがちだが、十分にやりたいことに取り組むことで、自分たちで、次の遊び方を考えていけることが分かった。しかし、子ども達だけで考えたり進めたりすることは難しい時期でもあるので、保育者が見守り、必要に応じた相談や助言等がさらに意欲的に活動する姿へと進むエッセンスになっていると感じた。
- 5歳児後半になると、「小さな困難」や「少し先の目標」に出会うことで、「何とかしたい。」という思いが強くなり、「どうすればよいか。」とやり方や仕組みを考える原動力となることが分かった。それを支えるために、保育者は、ともに考える同志や子ども達より少しだけ先を進む目標となる存在を、子ども達の様子や遊びの内容によって使い分けることが必要であると考えた。
- どの事例においても、保育者や友達の様子が、興味をひくきっかけとなっていた。そのため、時期やクラスの様子などに合わせ、子どもが選択できるような物の準備や互いを感じ合えるような場の構成、子どもの気持ちの高まりに合わせた臨機応変な時間の使い方や活動内容等が大切であると感じた。

6. 今後の課題

- 子どもが主体的に活動し、いきいきと遊びこむためには、クラス全体や一人一人の発達の姿に合わせた保育内容や保育者の援助が必要である。その為にも、保育者自身が教材研究をしたり、感性を豊かにしたりすることが必要である。また、発達段階を見極めるためにも、保育の記録を工夫し、保育を振り返ることも大切にしていきたい。
- 小学校の敷地内併設園である特色を活かし、さらに小学校との連携を深めることで、子どもの活動も豊かになる。今後も連携の在り方や方法の工夫を行っていきたい。